香美市文芸　風の流れ

【短歌】　岡崎　桜雲　選

梅雨の下草刈り摘果野良の虫雨と土の香嗅ぎて蠢く　原　茂

病む足を宥めて家事をこなしつつ花を眺めてささやかに生く　中村　紫乃

神池を詠みし母の短歌披露して喪主の最後の孝行なりし　森本　幸美

空の色風の色さへ変はらねど確かに今朝は秋に入りたり　山﨑　貴子

鳥居ごしに仰ぎて安心氏神の葺替えおえし屋根美しく　五百蔵利美

舗装路の割目の草に花咲きぬ杖投げすてて靴音立てむ　西野地　薫

海の日の青と白とのコントラスト暑さ忘れるミコノスの風車　岡本　初美

人住まぬ古家は梅雨に壊されし土煙なく微かなにおい　小松　敏子

紫蘇揉みて搾りまた揉み濃き色の美しきかな梅にまといて　濱口　初代

農やめし卒寿のわれの培へるそこばくの茄子その紺やよし　大岸由起子

夏空に木槿の花は映えてをり真白に紅さし気品漂ふ　盛岡　雛子

うたたねの安らぐ息に吾もまたつられて嬉しはつ夏の午後　公文　千恵

「辛抱」という二文字を傍らに耐えて生きたる昭和を思う　吉本　悦子

捩花の一つ一つに口入るるタマムシの吸ふ蜜はいかほど　古川　安子

青田の上を低空飛行交はしゐる燕ら虫を捕りてのことや　大石　綏子

両の岸に山百合は咲き小流れに糸とんぼ飛ぶ岸辺を歩む　松中　賀代

狂言師に習いし笑いを繰り返す独り居なれば声はり上げて　門田　明子

音もなく動きゆくものあぢさゐの葉隠れになにを蛇の狙へる　竹村　咲子

座るにも立つ時もみな足に重力過ぎ来し方の重みの重なる　武内　弘子

盛夏の花の女王はやはりグロリオサ道行く人も眺めてゆけり　林田　幸子

帳おり篝火灯せる社殿での狂言にふと笑いをもらう　小松　禮子

何気なく見上ぐる空に梅雨晴れの十三夜の月淡淡と照る　公文　正子

こころ残り重ねて生きて仰ぐかな煌めきそめし夕星いくつ　坂上のぶ子

あと三年で父の歳に届くかと歌は生への力なるべし　小松もとみ

をりをりのあつき言葉に扶けられ生老病死凌ぎきたりき　佐竹　玲子

灰汁抜きも指黒くなる皮剥ぎもなぜかうれしい春の日なれば　都築　初代

この家に帰る事なく逝きし子を守りて共に一夜を過す　古谷　由美

君ら帰りし後の静けさ今日もまたソファーの下に玩具がふたつ　佐々木真里

機械植えの田んぼ広々日日青む韮生米なる土地柄にして　小松　信子

名を知らぬ花が次々咲いて居る妻の遺しし花壇の隅に　宮地　亀好

梅雨晴れに突然降りし夕立ちに打たれて濡れしショルダーバッグ　徳弘　光子

耕運機につきて虫食む五位鷺の歩を合はせゐる仕草かはゆし　岩井　純子

フェリーにて巌流島へ渡り着く武蔵小次郎に思い寄せつつ　寺内　啓子

吹き竿にガラス種つけ息吹けば膨らむ宇宙くるくる回す　秋　星

山一つ越えたる思ひ茶の湯終へ路地にはためく龍馬の幟　町　耿子

伸びやかに元気に育て幼児よ輝く未来祈りて乾杯　明石　敬恵

妹の衣装眺めてその後に着こなし良いと喜びほめる　吉川　恵

きょろきょろとどんぐり目出こぼれそう膝の上にて笑うみどり児　中村　佐代

一輪良し束ねても良し姫向日葵生ける楽しみ部屋のあちこち　刈谷美代子

古きわが家にお茶をしようと友ら来る小さき花々若葉の中で　野村　典子

年老いて怪我は駄目だと人の云ふしみじみわかる快復遅く　野島　富石

朝支度終え茶を点てるひとときの平和しみじみ八月六日　小松　美鶴

俳句は偶数月、短歌は奇数月に掲載します。掲載を希望される方は、掲載月の前月1日までに、ご応募ください。

【投稿先】香美市役所総務課内広報委員会事務局「俳句・短歌」係
〒782－8501（住所記載不要）　FAX53－5958